

閲覧ニュース

100号 記念号

2007.4.1

Contents

閲覧ニュース100号記念によせて ……大林康二	1	図書館は大学の象徴的存在！ ……石多正男	6
誕生日と命日 ……新村 拓	2	北里大学中央図書館構想について ……宇野彰男	7
本当のこと ……手塚 甫	3	「心ゆたかに生きる	
思い出すまに ……小野健一	4	ーターシャ・テューダーの世界ー」 ……潮田万弓	8
森へ ……横井洋太	5		

閲覧ニュース100号記念によせて

大林 康二

今春発刊の予定の閲覧ニュースが100号になるということで記念号を出版することになった。この記念号では、教養教育と教養図書館について、過去・現在・未来を改めて見つめてみようということで、教養図書館長を務められた先生、一般教育部長、図書委員、全学の図書館事務の運営をして頂いている事務の方に、自由にエッセイをお寄せ頂いた。いずれも教養教育とそこでの図書館の書籍の意味を改めて認識させてくれるすばらしいエッセイである。

北里大学教養図書館の建物は、こじんまりしているが相模原キャンパスのなかで独特の美しさと雰囲気醸し出している。その外観と空間構成は北里研究所本館のイメージを継承しているという。メインストリートの北里柴三郎の銅像とともに、学祖に思いを馳せさせてくれる貴重な建物だ。教養図書館長を務められた手塚甫先生の「本当のこと」は学祖の未発見の事実を知らせる中瀬安清名誉教授の研究を紹介した貴重な文章である。新入生の皆さんもこの文を読んで学祖の医学者としての「並々ならぬ情熱」を感じずには居られないだろう。

教養教育を学ぶ短い期間は、学生の皆さんが、高等学校の受験教育から開放されて、専門教育へ進む前の、人生について考え、自分の未来に多少の余裕をもって思いを馳せることができる貴重な時間である。教養図書館長を務められた小野健一先生は、「オルガン」に象徴させて、教養教育の意味を伝えてくれている。また、生命科学の総合的な教育・研究機関として活動する本学にあって、ともすれば生きるという側面だけに眼を奪われがちだが、隣り合わせの死と命日についての新村拓一般教育部長の一文は、生命科学の職に就いて活躍される皆さんに、将来きっと、大事なことを思い出させてくれるに違いない。

教養図書館長を務められた横井洋太先生は、愛蔵の写真集を文系的視点と理系的視点で捉えた対比を紹介されていて深みがある。皆さんも、教養図書館の開架式の書架を巡りながら、書籍をいろいろ取り出して目で眼を通して思いを巡らせるうちに、そこから新しい世界を見つけることがあるに違いない。教養時代は、皆さんの生涯にとっての「愛蔵の書」に出会うチャンスが多いはずである。

この100号記念の閲覧ニュースを発刊する折しも、北里大学相模原キャンパスでは、建物を大幅に建て替えて、キャンパスを刷新する計画が立てられている。その中であって、現在キャンパス内に点在する図書館は「中央図書館」として集約される可能性が高い。一般教育部図書委員の石多正男教授と医学図書館の宇野彰男課長に、サービスを受ける側と提供する側の立場で中央図書館についてのお考えを紹介していただいた。学生の皆さんからも、中央図書館についてご希望をお寄せいただきたい。

建物は中央の一つになったとしても、その一角で、この100号記念に寄せられた教養図書館の精神は脈々と生き続けるに違いない。

(教養図書館運営委員・物理学)

● 閲覧ニュースは教養図書館ホームページでご覧になれます。

URL : <http://www.kitasato-u.ac.jp/clas/jimu/library/kyouyoutosyokann/libindex.html>E-mail : kyoyolib@kitasato-u.ac.jp

誕生日と命日

新 村 拓

子どもが小さいうちは誕生日の祝いといっても、それは親にとっての記念日にすぎず、子どもに迷惑顔されることもある。誕生日プレゼントがもらえる日であると分かって、はじめてともに喜べる祝いの日となる。かつての日本社会には誕生日を祝うという習慣はほとんどなかった。それはお正月に加齢する数え年で年齢を数えていたからである。ケーキにロウソクを立てて華やかに祝うようになったのは、一般には満年齢で年を数えるようになった戦後のことである。

生が長い間、全国一斉に祝われていたのと対照的に、死のほうは「祥月命日」といって、その人が亡くなった同じ月日に仏事や神事を行う習慣があった。誕生日が画一的であったのに対して、弔いのほうは個別的な対応がなされていたのである。これは言い換えれば、人はたんに生まれたというだけではあまり意味がなく、その後どう生きたのか、ということに重みが置かれていたとみることができる。

かつては「七つまでは神のうち」と言われ、その年齢までの命は危ういものといった認識があった。明治になっても出生届は子どもがかなり成長した後に出されている。誕生日はたんに生まれた日というにすぎず、死亡日とは重みが違っていただのである。

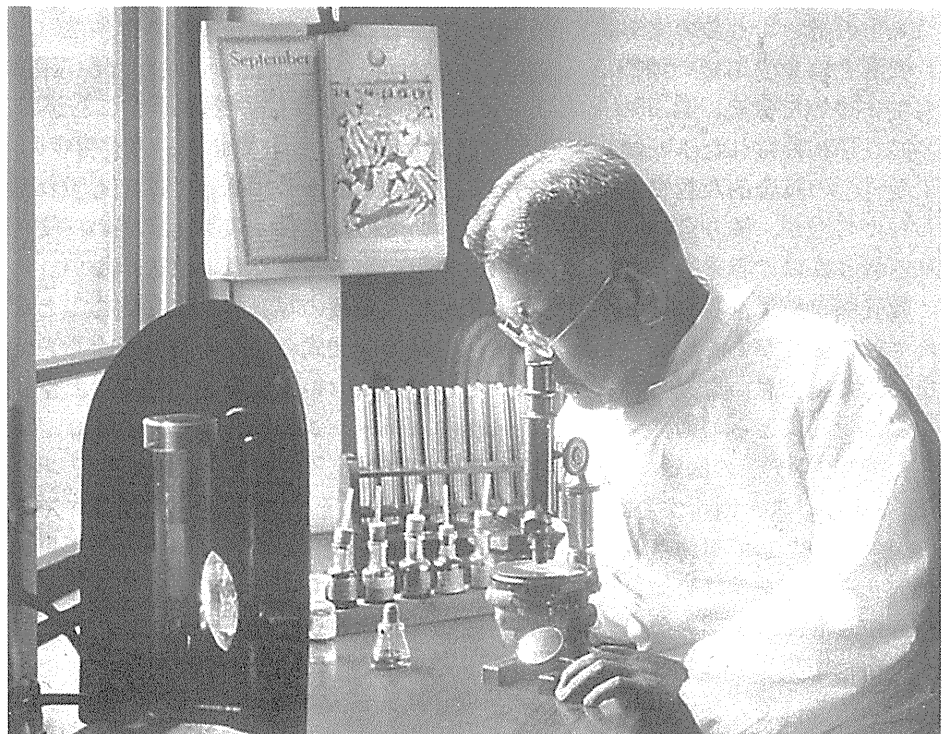
死は生に比べて個別個性的な捉え方がなされていたわけだが、その死も「弔い上げ」と言われる33回忌（死後満32年目の年忌）を過ぎるころになると、急速に個性を無くしてしまう。それまでは誰々の霊と呼ばれていたものが、ご先祖様という普通名詞で呼ばれるようになる。ちょうどその時期は、一世代が終わって孫の代を迎え、故人の生前の記憶も薄れたころにあたる。故人が「個性を無くしたそん

な祭り方はいやだ。」と、どんなにあがいたところで、生者への働きかけの術を無くした身ではどうしようもない。

戦後、そうした生死にかかわる祭り事も大きく変わってしまった。医療の進歩や衛生環境の改善によって乳幼児の死亡率が低下し、夭折といわれた若者の死も減り、平均寿命は大きく伸長することになったのである。そのことによって人びとは死の恐れから解放され、宗教よりも医療に関心を寄せるようになり、他方では少子化によって子どもは親の期待を一身に集めることになった。その結果、先祖の命日は忘れられても、誕生日のほうは盛大に祝われるものとなっていった。

毎年4月、大学はたくさんの新入生を迎え、はなやいだ雰囲気満ちている。新入生のみなさんはこれからしっかりと学んで自分を磨き、人生を豊かなものにしてほしい。そして、かつては出発よりもその人がいかに生きたか、を問うた「命日の文化」のあったことも覚えておいてほしい。

（一般教育部長・歴史学）



研究室にて
明治43年（1910）に撮影されたもの。北里はこの当時、ツベルクリンの応用改善に腐心していた。
（写真提供 北里研究所 北里柴三郎記念室）

本当のこと

手塚 甫

中学や高校の同窓会にたまに出て、久しぶりに旧友に会うと、自分も相応の歳になったのだと思い知らされるが、それはあくまで暦の上でのこととし、相変わらず同じ失敗を繰り返しては、まだ若い証拠かな、などといい気になっている。歳をとることに今も大きな抵抗感がある。そんな中でも歳をとったからこそと自分でも認めることがある。それは権威だとか肩書きというレッテルに隠れて、いかに真実らしきこと、つまりまがい物が横行しているかと言うことである。それらのまがい物は事実を明らかにしさえすればすぐにも正体が見えてくるのに、それをしない場合が少なくない。本当のことを知ろうと思えば、些細と思われる事でも、その事実をきちんと確認する手間を惜しんではならない。

最近もそんな経験をした。他でもない北里柴三郎先生のことである。北里柴三郎について書かれたものは既に数多く出ている。しかし、毀誉褒貶の振幅が頗る大きく、どちらの言うことが本当か迷うことが多い。このこと自体は北里の存在の大きさを物語っているのだが、どちらの立場に立つとしても、きちんとした事実に基いていなければならない筈である。ところが北里をめぐる問題には事実の確認が十分でないことがまだまだ少なくない。

例えば恙虫病の研究活動についてであるが、北里は明治25年7月、8月と翌年8月、9月の二度、恙虫病の研究調査に新潟県の新関に赴いている。ところが、この事実が北里に関する正統な伝記と誰もが認める宮島幹之助編「北里柴三郎伝」にも全く触れられていない。破傷風やペスト、結核等の研究に比べたら地味で目立たないから無視したのであろうか。また、その時期が北里のドイツ留学から帰国した直後にあたるのだが、数ある北里の伝記の中には帰国後の北里は何もすることがなく北里のためにと福澤諭吉の援助で伝染病研究所が出来るまで暇を持て余していた如く書いてあるものもある。

こうした点に疑問を抱き、本学の薬学部で微生物学を担当していた中瀬安清名誉教授がその専門の立場から北里の恙虫病研究の活動を調べ直し、最近それを纏めて発表した。ここでは、その中の一部、北里がその目的地新関に至った経路に限って紹介する。

ただでさえ北里の恙虫病研究について知る人が多くないのに、その研究を知る人達の間でも新潟の目的地までの経路を「上野から福島に出て磐越西線で行ったのではないか」と噂して終わっていたそうで

ある。この人達でさえ磐越西線が開通したのはやっと大正3年になってだということを確認しないままにしていた訳である。中瀬名誉教授は今回、当時の交通事情を具体的に調べた結果、北里は上野から日本鉄道を利用して高崎に至り、高崎から人力車で渋川に出、そこから馬で六日町に向かった。ここからは蒸気船で信濃川を下って新潟に出、今度は阿賀野川を遡って目的地新関に10日かかって到着した、という事実が明らかになったのである。この事実だけでも従来の北里の伝記に見られる誤りを正し、不足を補う大きな意義がある。が、それに留まらず北里の人間像についても、改めて我々に教える所が少なくないのではなかろうか。

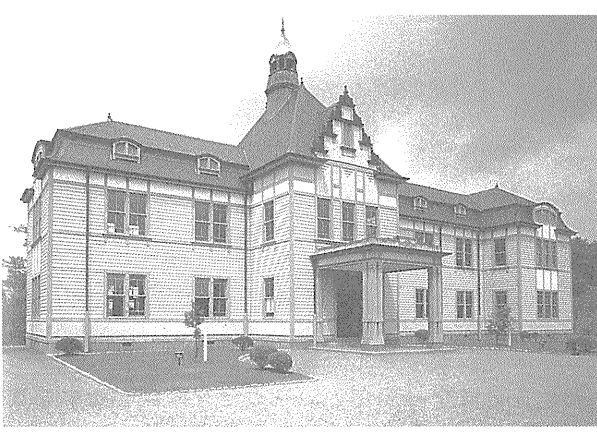
北里はドイツ留学を終えて帰国途次、イギリスやアメリカの有力な研究所、大学、病院から破格の待遇を約束するポストを提供された、ということは多くの本に触れられ、証拠もある。それら全てを断り、輝かしい業績を残した6年余の留学を終えて帰国したのが明治25年5月28日。その疲れを癒す間もなく、何日もかけ、馬で山越えるなど苦勞の多い長旅をして目的地に向かった。しかも二度までも。更にその対象とする恙虫病は一地方のいわば風土病で、決して人の目を奪うことない、研究対象としてはむしろ地味な病気である等のことを併せ考える時、医学者としての北里の本意がどこにあったかが、自ずと明らかになって来る。一途に伝染病研究にかけようとする北里の並々ならぬ情熱を感じずにはいられないのではなかろうか。

北里についてはまだまだ明らかにされなければならない事実が多く残されている。従って本当の北里の姿もまだ十分には明らかになっていないと言える。

ここに紹介したのはほんの一例であるが、自分がほんとうには納得していないことを、活字になっているからとか、有名な人が言っている事だからというだけで盲信しようとする事への戒めにはなるはずである。今や、レポート作成など調べ物には不可欠になったインターネットを利用する場合には、更に留意する必要があるだろう。これは学生諸君だけに言えることではない。私自身肝に銘じておかねばならない事柄でもある。

(付記) 北里柴三郎先生は本学の学祖であるが、ここでは歴史上の事実の当否を論ずる性質上、敬称を略した。

(元教養図書館長・社会学)



(写真提供 北里研究所 北里柴三郎記念室)

思い出すままに

小 野 健 一

北里大学で長い間図書館長をさせて頂いた間、一番印象に残ったのは図書館の移転と、オルガン設置の計画であった。前者はわたくしの在任中には実現しなかったし、後者は遂に計画だけに終わったが、今考えると一寸高望みだったかなと思うが、残念だったことに変わりはない。

図書館は当時教養部の三階にあったが、手狭になってきたので新しい建物を新設することになり、現在のところに移った。教養図書館というので、設計をなさるかたが張り切って、ちょっと童話風の今の可愛い建物が出来上がった。屋根の上に塔を建て、そこに鐘を吊るというので、大いに期待していたら向こうの透けて見える塔が建ち、小さな鐘が下がった。中に入って見ると、外観とは打って変わって、近代建築定番の打ちはなしコンクリートの、しかも極めて質の良い仕事で、コンクリート打ちの精度も高く、表面の仕上がりも申し分なく、見ていて気持ちが良い。ここで働く方たちも、前の図書館よりも勝手もよく、明るいところで快適な毎日进行していらっしやるだろう。

オルガン設置は一寸手ごわかった。というか、始めから無理だったのかも知れない。

北里大学へ初めて来たとき、わたしは正門から真っ直ぐ教養部まで続く銀杏並木とその先にある樺の大木、銀色に輝く教養部の建物の眺めが気に入って、教養部の建物に入ると早速内部はどうなっているのか探検して、最上階は講義室であること、外観の大きさに反してこじんまりした階段教室であることを知った。教壇の背後にオルガンがあったらなあ、この広さなら小さなオルガンで良い、この講義室にオルガンがあったら、まさに画竜点睛なのだが、と思ったものである。

経緯は知らないが、予期せぬ予算、確か三百万円、が教養部へ来て、早速、何に使うか委員会のようなのが出来、確か一回だけ開かれた。わたくしは

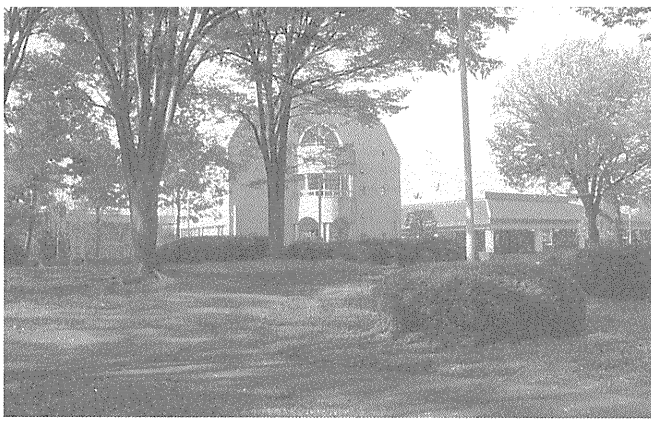
早速オルガンを持ち出して、最上階の講義室に設置する事を主張した。現在はちょっとしたホールはオルガンを持っているようになったが、当時は国立でもオルガンを持つ大学は殆ど二つか三つだった時代で、大学の先生にとってもオルガンと大学とは中々結び付かなかったようだし、まして文部省の連中には大学に情操的環境というのは理解を越えた、まさに「驢馬に渡れない橋」だった頃だから、大学にオルガンをなどと言っても現世のおはなしとは信じられなかったに違いない。そんな頃だからわたくしの主張は呆気なく退けられて、何だか分からない内に虎の子の予算は、新聞名は忘れたが、その創刊号からのフィルムに変わった。

日本の街の汚らしさはどうだろう。東京へ来る外国の観光客は一体何を見て帰るのだろうか。見るものはなんにもない。結局、すき焼きでも食べて帰るしかないだろうと同情する。

街の美観を取り戻すにはどうしたら良いか。建築家のグロピウスによれば「迂遠のようだが、初等教育の段階で情操教育に力を入れるほかはない」ということになるのだが、大学だって情操的環境を整えるのが大切なのは言うまでもない。

ところがこの情操というのが世の中で一番理解されにくいことのようにわたしには思われる。誰かさんの言葉ではないが「情操とはなにかわたくしは知っている。しかし、それをことばで言いあらわすことはわたくしには出来ない」という甚だ厄介な代物である。まして情操教育となると途方に暮れるのだが、それが大切なことに変わりはない。どうすればよいか、結局、情操的環境ということに落ちつく次第で、そのなかで教育される側が自然に熟成されるのを辛抱強く待つしかない。と言うわけで、教養部の最上階の講義室にオルガンを、というわたくしの夢がいつの日か実現されることを願って止まない。

(元教養図書館長・物理学)



(教養図書館と学生ホールの遠景)

森



横井 洋太

閲覧ニュース100号に原稿を書くことになった。教養図書館長の職を以前務めたことと、定年退職の時期が100号の発行時期と偶々一致したことが理由のようである。そこで“本”、“100”、“過去”の三つのキーワードであれこれと考えた。そして、一冊の写真集が頭に浮かんだ。

“Kinsey PHOTOGRAPHER – A half century of negatives by Darius and Tabitha May Kinsey” (Dave Bohn and Rodolfo Petschek Chronicle Books 1983) の全訳本“森へ ダリウス・キンゼイ写真集” (田口孝吉訳、アボック社1984) である。私の20年来の愛蔵書であるこの写真集は、約100年前のアメリカの自然とそれに挑んだ人々との見事な記録集である。そして、写真の美に満ちた芸術書である。

100年前の北アメリカ西部ワシントン州のカスケード山脈に沿う高地には大森林が広がり、幹径3m以上、高さ90mを超えるシーダーやジャイアント・ファーの大木が鬱蒼と茂っていた。この大森林を伐採し、巨大な材木を運び出し、製材する西部開拓時代の人々と自然の姿を、ダリウスは、大型ガラス乾板を用いて撮影し続けた。現存しているガラス乾板ネガは11×14インチ型が主だが、巨大な20×24インチ型も残っている。大きいものでは新聞紙ほどもあるそれらの乾板は、彼の妻タビサによって完璧に現像された。写真集冒頭のタビサへの献辞は、彼女の仕事を讃えるものである。

1975年の原書初版出版以来、この本は多くの人々に様々な感慨を与えてきた。

純粋な写真愛好家の人たちは、すでに過去のものとなった巨大カメラと巨大ガラス乾板による写真の最高傑作として、今の写真技術では作れない美の存在をこれらの写真から認識する。一方、自然科学や技術に携わる人々にとっては、これらの写真は、か

つて、アメリカ西部に広がっていた大森林の様相とその伐採技術の貴重な資料である。私がこの本を手にしたきっかけもそれであった。

そして、人間の有り方や文化に関心を寄せる人々は、人の社会の展開に伴って壊されていく自然と破壊者である人間の姿の象徴をこの本に見出す。この本の巻末の解説に、中上健次は「巨木を切り倒す男らの、戦利品を前にしての記念写真めいた写真の顔に明らかであるように、男らは不安である。」と書いている。土俗的なものの中に真の人間性を見出そうとしていた彼の眼は、ダリウスの写真を、ダリウスの心に潜む深いトラウマの顕現として見ている。

しかし、私の印象は、中上健次とはずいぶん違っている。これらの写真から私が感じるのは、偉大な自然に立ち向かうことの喜びと誇りである。大木の切り込み口に厳粛な顔つきで横たわる樵人、シーダーの切り株をくり抜いて作った住居、高さ30mの構脚橋で峡谷を渡る木材列車、切り払われて煙が燻る伐採地、直径5.3mの丸太の上に乗った10名を超すピクニックの一行などなど、大形ガラス乾板による味わい深い画像の数々から、巨木の偉大さとそれへの畏敬、そして、それを伐り、森を拓いていく人々の素直な誇りを私は先ず感じる。

中上健次の印象は多分的を射ているのであろう。理系の人間は、文系の人から、しばしば楽天主・近視眼的合理主義者といわれる。これまで理系職業人として生きてきた私の、この写真集への印象もまさにそれなのかもしれない。

この本は、人の行為や感覚について沢山のものを考えさせる。この四月からの新しい生活は、どんな感覚を私に与えるのだろうか。しばらく時を置いて、そのうちゆっくりとこの本を開いてみたい。

今は、また森へ行きたいと思っている。

(元教養図書館長・生物学)

図書館は大学の象徴的存在！

石 多 正 男

私が担当する一年生対象の授業で学生に「もし、あなたが北里大学というテーマで写真を撮るとしたらどこを撮りますか？ それはなぜですか？」という課題を与えた。圧倒的に多かった答は「メイン・ストリートと北里先生像」だった。そして、次に多かったのが「学生ホール」だった。前者の理由は、大学に入っていく様々な学生の後ろ姿は、北里大学が総合大学であること、そして学生の将来に対する前向きな気持ちが表れている、というものだった。後者の理由も基本的には同じものだった。

さて、残念ながら今や「図書館」という言葉は死語になりつつあるのではなかろうか。かつて、人は情報を得るには図書に頼った。今は違う。まずインターネットであり、時代はペーパーレスである。だから、メディアセンターと呼ぶ大学も増えてきた。メディアセンターは情報がすぐに手に入れられる基地としてよりふさわしい呼称だと思う。では、図書館に本はいらなくてコンピュータだけがあればいいのか？あるいは建物そのものも必要ないのだろうか？時の流れは確かにそのような図書館到来が近いことを告げているかもしれない。それでは、図書館はなくてもいいのか？インターネットのサーバーのような目に見えない存在が図書館でいいのか？いや、それは違う。私は違うと思いたい。

人が生きていくためにもっとも必要なもの、それはその人のアイデンティティを確認できる快い居場所があること。自分の存在が認識でき、人から自分が認められ、心が落ち着く場所！それは心の中にあっていいし、家族や恋人などでもいい。当今の犯罪や心の病に苦しむ人の増加は、このような居場所を失った人が多いからではなかろうか。自分に自信がない、自分などいてもいなくても世の中には関係ないと思っている人がいかに多いことか。実は、この居場所の問題は大学にも当てはまる。北里大学の学生に大学内での居場所があるだろうか。卒業後

に思い出す場所はどこだろう。現状ではおそらく各学部の校舎、研究室だろう。でも、彼らはそれに心から満足しているだろうか。医師も薬剤師も看護師も、また獣医師やその他の身分の方々も、その狭い社会の中だけでは生きていけない。患者がいて、友人がいて、家族がいる。社会は複雑な有機体であり、いろんな人が絡み合い、混ざり合って動いている。そんな社会の中で、「北里大学卒」ではダメで、学部名まで言わなければならないとしたら、私たちは淋しい。せつかくの総合大学なのに。

北里大学は各学部の独立性がかなり強い。しかし、北里大学が世間から評価が高いとすれば、その理由の一つは総合大学だからである。これに呼応するように近年農医連携など学部の垣根を越えた研究組織の改編が進められている。平成19年度には学生に大学全体を意識させるための自校教育「北里の世界」が新規開講する。その他、学生は他学部の授業を受講できるようにしようという動きも数年前にはあった。また、生涯教育や地域貢献として大学が社会人を対象とする講座や授業開放の動きもある。このような学部の垣根を越えた大学全体の活動は、今後さらに加速するだろう。そして、こんな時期に一つの強固な有機体としての大学を象徴する存在が必要ではなかろうか。そして、それは図書館しかないのではなかろうか。

実は、平成18年5月に行われた北里大学中央図書館構想ワークショップで、数人の方々がこのような考えを示しておられた。象徴的な建物を作り、これに例えば北里柴三郎記念館、美術館などを入れよう。私は学生ホールのようなスペースもあっていいと思う。7学部の研究者と学生のすべてが同じ気持ちで図書館を眺め、入館し、その中で同じ「叡智と実践」を念頭に研究に励む。そんな図書館が北里大学中央図書館の理想の姿だと思う。

(教養図書館図書委員・芸術学)

図書館の延滞罰則が変わりました。

*****貸出停止の罰則となります*****

北里大学図書館では延滞図書への罰則として、今までは延滞料金の徴収をしておりました。しかしながら、図書館で現金を扱うことの処理の煩雑さや、罰則をお金で済ませてしまうことの正当性や合理性などに疑問視する声などもあり、図書館では納得できる対応について数年来の課題でもありました。延滞罰則の変更は利用規程の改定にかかわりますので、運営委員会等でも慎重に検討して参りました。そして、平成19年4月2日より、延滞者には貸出停止という厳しい罰則になりました。

延滞日数に応じての貸出停止となります。複数冊の延滞は加算方式で適応します。

例えば、3冊5日間の延滞の場合は15日間の貸出停止となります。

北里大学中央図書館構想について

宇 野 彰 男

現在、北里大学相模原校舎には、教養図書館、医学図書館、理学部図書館、看護学部図書館の4つの図書館があります。平成6年（1994）に医療衛生学部が新設された時は、さすがにもう一つ新しい図書館を作るのではなく、医学図書館が医療衛生学部を利用対象に加えるということになりました。

このように一つのキャンパス内に多くの図書館を抱えているということは、それなりのメリットもありますが、デメリットもかなりあります。

メリットとしては、それぞれの学部の専門性に応じ、必要な資料を効率よく収集できるということであり、たとえば看護のことについてであれば、看護学部図書館に行けば関連した資料のみを重点的に集めているので、広い図書館のあちこちで探すより効率的でしょう。

また単科の看護大学では一般教育に必要な図書から看護学書、臨床医学書までかなり広い範囲の資料を収集しなければならないのですが、同じキャンパス内に一般教育の図書館、医学の専門図書館があれば純粋に看護関連だけに絞った収集が可能となるので、スペースや資料費の観点からも効率的になります。図書館の場所も学部の校舎内に設置できるので、その学部の利用者にとっては便利です。

デメリットについては、利用者の観点からすれば、いくつかの分野にまたがった資料をさがそうとすれば、一つの図書館だけでは用が足りないということになります。看護の資料を求めているも、もう少し臨床医学の資料が見たいと思ったら医学図書館に行く必要も出てきます。同様に教養図書館や理学部図書館に行かなければならない事も考えられます。

利用者からの要望の多い開館時間の延長についても、4つの図書館で同じように深夜までの開館を実施しようとすれば、設備投資・人件費等の経費も、重複して相当かかってしまうことになります。

相模原キャンパスのように歩いても数分以内で通える環境であれば、図書館は一つに集約した方が、いろいろな意味で有利だといえます。他大学を見ても複数学部を同一キャンパス内に持つ大学では、中央図書館を置いているところが多いようです。

北里大学でも創立まもなくから中央図書館の設立を求める声が多く、これまでに何度か具体化しようとした動きもありました。特に平成7～8年度の2年間にわたっては、「北里大学中央図書館構想ワークショップ」を開催し、50頁になる「北里大学中央図書館設立提案書」をまとめました。

この後10年を経過しましたが、相模原キャンパス再開の動きにより、この提案書の内容を基本に、新たに中央図書館構想を考えるべき時が来たものと思われる。

既に病院の建て替えは現実のものになりつつあり、一般教育部の全面的建て替えも検討されています。その後には医学部、看護学部の校舎建て替えも予定されており、この機会に今後の50年を見越した図書館計画をしっかりと立てておくことが必要でしょう。

この10年間の図書館の変化はそれまでの10年間とは比べものにならないほど急速であり、電子ジャーナルがこれほどまでに利用されるようになるとは考えられませんでした。今後の10年を予測することは困難ですが、図書館の在り方が根本的に変わってしまうほどの変動期であることは確かです。

この中で北里大学は、生命科学の総合大学として他のお手本となるような、未来志向の図書館像を実現できたら素晴らしいと思います。その時は「図書館」ではなく、どんな名前と呼ばれるようになっているのか興味のあるところです。

（医学図書館課長・大学図書館事務統括責任者）

図書館の相互協力

1. 相模原市内大学図書館と相模原市立図書館との相互協力

相模原市内に所在する大学図書館と市立図書館との間で相互協力について協定を結び、平成6年よりサービスを開始しています。これは各協定館の事情の許す範囲内において、利用者への利便を図るもので、当館では資料の閲覧、貸借及び複写等に限定しています。現在参加館は麻布大学、和泉短期大学、相模女子大学、女子美術大学、職業能力開発総合大学校、青山学院大学と北里大学の相模原キャンパスに所在する4つの図書館です。

2. 神奈川県内大学図書館相互協力協議会

神奈川県内には大学図書館、短大図書館をあわせると37大学の大学図書館があります。各館で所蔵する資料の有効活用のためにお互いに協力をしあいながら利用者サービスの充実と拡大をめざすものです。他大学の学生へ一般公開している大学図書館もありますが、身分証明書や紹介状などの持参、事前連絡が必要となりますので、利用する場合には必ず、教養図書館のカウンターで手続きをして下さい。

「心ゆたかに生きる－ターシャ・テューダーの世界－」

「人はね、大切なことをすぐ忘れてしまう。だからクリスマスが必要なの」とターシャは言う。そんなターシャの2006年夏から秋、そしてクリスマスを迎えるまでの日々を追った番組が放送された。(2006.12.25 NHK総合)「ターシャからの贈りもの、魔法の時間のつくり方。夢があふれるターシャ・テューダーの絵本と庭そして心ゆたかに生きるとは」。ご覧になった人もいないかもしれないが簡単に紹介したい。

ターシャ・テューダーは1915年ボストンに生まれ、23歳の頃、絵本作家としての道を歩み始めるが生活は厳しく、4人の子どものを生き育て、自給自足の生活の傍ら絵本を描くという暮らしであった。絵本は誕生日、クリスマス、イースター、村まつりなどを子どもの成長とともに等身大に生き活きと描いている。絵本作家として全米の児童文学コルデコット賞を受賞している。また、人形作家としてはLIFE誌にも特集で組まれた才器であるがすべては子どものために、がターシャの願いだった。

ニューハンプシャー 州に27年間住み、57歳でバーモントに移り住み30万坪にも及ぶという土地を求め庭づくりに励む。3歳の頃見た黄色のバラの美しさが忘れられず花を育てることを決意する。それは荒れ果てたじゃがいも畑と広大な森を耕すことから始まった。それから35年。ターシャの庭は世界中のガーデナーたちにも一目置かれる究極のナチュラルガーデンだという。庭は一夜にしてならず人生そのもの、と91歳になる今も自然とともに生きる喜びを語る。「三つ子の魂」そのもの、自分に正直に、ひるまず、へこまず、夢にむかう一人の女性の志とスタイルに言葉にならない感動と、今風に言えば「チョー格好いい」おばあちゃんだけど年齢を超越した永遠の少女の姿を見る。

ターシャ・テューダーの壮大なロマンから様々なメッセージが読みとれる。ターシャの庭は体力の衰えとともに、徐々に自然に返したいという。自然から頂いたものを自然に返す、「身に余る」ものは返上した

い、大切なことは大事にあたためたい。苦しいか否か、厳しいか否かは自分の気持ち一つという潔さ。「効率」や「成果」「評価」などとは次元の異なる世界が広がる。優しくゆったりした時の流れがゆたかな人間力を育むことを知る。

昨年、99号で紹介したアーサー・ビナード(漢字名*朝・美納豆)さんはその後更にご活躍で、平和問題にも言及したりメディアへの登場も多い。(この閲覧ニュースがきっかけで絵本「ここが家だ」がサイン入りで後日届いた)。教養図書館の先輩Fさんは退職後、地域で文庫運営を25年余、読み聞かせや読書活動の様子(時には学校図書館や公共図書館への提言なども)を細やかにお便り下さる。世界は違うが彼らから学ぶべきは人間としての品性と感性、希望と持続である。それは時空をこえ、人間として豊かに生きることについて考えさせる。生きる喜びを感じる瞬間でもある。

日本では昨今、いじめによる子どもの自殺や虐待など心痛む事件が続き「命」や「人権」の見直しが迫られている。しかし、なんら解決策を見い出せず子どもの環境はますます閉塞化状況に。命が大切と理解しても容易に身に付くものではない。多くの体験と読書から想像する力と感じる心を養う以外にはない、と私は思う。過剰なものと情報の中で逆に見失うものが多いことに私達は気づいている。真に大切なものを自分に問いたい。クリスマスは一人静かに過ごすのも良い。ターシャの暮らしを紹介したこの番組は時宜をえたビッグなクリスマスプレゼントであった。前年に放送された「喜びは創りだすもの」他、図書「ターシャの庭」「ターシャの家」「暖炉の火のそばで」もご参照されたい。

さて春、4月。大学に晴れて入学された皆様にはターシャ・テューダーのころざしと暮らしを紹介して「夢の実現」へのエールとはなむけに代えさせていただきます。(潮田万弓 教養図書館 3月退職)

編集後記

100号発行を機に1号から99号までのバックナンバーにざっと目を通す。1973年5月、手書き、手摺りから始まったニュースは32号あたりから写真入りで今日の定石ができあがったようである。第3号では故桂芳久先生が著作「海鳴りの遠くより」の出生と三島由紀夫について書かれている。第12号からは立川昭二元館長発案の「推薦図書」にちなんで、シリーズ「本と私」に30余名の先生方と、学生さんも健筆を揮って下さった。

その中には、今は亡き元館長綱島先生の(書物の背の商標に触れ)「Festina Lente」ラテン語で「ゆっくりと急げ」、本とはそんなものかもしれないに改めて深い感銘をうけた。当時の学生の文章には熱いものがこみあげてくる。

歴代の館長(立川、綱島、小野、吾妻、手塚、横井、坂入、伊藤俊洋の各先生)の牽引力も大きいものであった。

インターネットやらモバイルやらと忙しいこの時代に、紙による配信にいかほどの意義ありやと気も重い日々、支えたのは「活字文化」への拘りであった。

厚さにして約3センチ。分量もさることながら、思いの強さ、思いの深さに圧倒された。継続可能だったのはその思い。大林先生の巻頭にあるように「教養図書館の精神」に今後も期待したい。多くの執筆者の皆様にはこの場をかりて篤くお礼を申しあげたい。

北里大学教養図書館閲覧ニュース

No.100 2007年4月1日発行
編集 北里大学教養図書館
発行責任者 大林 康二
〒228-8555 相模原市北里1-15-1
Tel. 042(778)8005 Fax. 042(778)9234